

—— 本号の主な内容 ——

- ・名古屋図書館史ノート(1) ----- 加藤 三郎 (名古屋市瑞穂図書館)
- ・<予告>第7回図書館史研究会名古屋セミナーの開催について
- ・昭和63年度決算報告
- ・昭和63年度事業報告

名古屋図書館史ノート (1)

— 大正時代における市立名古屋図書館の児童に対する奉仕について —

加藤 三郎 (名古屋市瑞穂図書館)

1

公共図書館における児童に対する奉仕を論じた図書の中で、戦前の市立名古屋図書館のそれについて紹介しているものは皆無といってもよい。

市立名古屋図書館(現-名古屋市鶴舞中央図書館)の歴史は、60有余年になるが創設以来児童への図書館奉仕が着実に行われて来ている。とりわけ、同館の初代館長阪谷俊策氏(1892-1977)の恩師は、和田萬吉氏(1865-1934)であることからしても⁽¹⁾ 児童に対する図書館奉仕についても理論的指導を受けていることが十分納得出来るところである⁽²⁾。

このような背景をも念頭におきながら、当時の活動についてみると、それなりに評価出来る面が多い。今日、各地の図書館において実践されている諸活動が、古く大正時代に行われていたことは、注目に価する。

ところが、現在の名古屋市立図書館の児童奉仕について語られる時、過去の経緯や先人の業績について殆ど目が向けられていないのである。

そこで今回は、筆者がかつて編集を担当した『鶴舞図書館四十年史』(昭和38年10月刊)の中で十分書き得なかった「図書館の利用者」「児童への図書館奉仕」の項を資料中心に補足しながら述べてみたい。

2

市立名古屋図書館では、大正12(1923)年9月28日開館式が行われた。館内に定員84名の「児童室」が設けられており、閲覧料は無料であった。開館当初の児童室は、「何時も満員の状態で、定員84人の外は、遙々遠くから来たものも、無断って帰へして居たが、それも気の毒と二回乃至三回に亘って這れ替へさへした

事がある。(大正12年)10月は小学校が75校で4,970人,中学校其他で799人であった。」⁽³⁾

ちなみに,同年10月の一般利用者は21,187人,11月は16,531人であり,児童室の利用人員は,10,11月ともに全体の21%を占めていた。しかし,この児童室は「中央図書館の中央児童室といふべき」存在であるため,「行く行くは,東京市の如く,各区に分館を設け,之に児童室を分属せしめて,各学校の児童も,其恩典に均浴するようにしたい」⁽⁴⁾ というように,すでにこの頃(大正13年)から今日いうところの「一区一図書館」構想が関係者から唱えられていたのである。

3

当時の「六大都市」の図書館において,児童室を設置していたのは,東京市立日比谷図書館(定員81人),神戸市立図書館(同52人),市立名古屋図書館(同84人)の3館であり,なかでも市立名古屋図書館の定員が一番多かった。

次に同館の児童図書の利用傾向(大正12年10月2日-同15日)を見ると,全体として利用の多いのは「童話」で,『オトギウタエ』3冊(巖谷小波著),『オハナシ』5冊(鹿島鳴秋著)が最もよく読まれた。ついで小波の旧い大版のお伽噺で,日本昔噺(一寸法師・安達が原・大江山・羅生門),日本お伽噺(玄武門・日吉丸・白虎隊・熊本城・高千穂),世界お伽噺(鉄の狼・孫悟空・骸骨島)がよく利用された。

これについて「高級な芸術的な童話書類も相当に調べられてゐるが,それらは殆ど顧みられなかった。子供に与へる図書としては,表現が簡明で解り易いといふことが第一条件であらうが,それと同時に,活字が大きくて読み易いこと,内容のあまり長すぎぬこと,挿画の豊富なこと,表紙の綺麗なことなども,読まれる読まれないに大いに影響して行くらしい。(略)」とし,小波の本がこれらの条件に合っているので,「歓迎される所以」であると評している⁽⁵⁾。

文学書では,『ロビンソン漂流記』(平田禿木訳),『十五少年絶島探検』(葛原しげる訳)があり,伝記では『エヂソン』『歴史の庫(秋の部)』,理科では『海の怪物』『水雷太郎』,一般では『イソップ物語』がよく読まれていた。

雑誌では『少年倶楽部』が最もよく読まれ,『赤い鳥』が「一番顧みられない」と書かれていることに注目させられる。

同館の児童室に備え付けられている雑誌(大正13年)は次のようなもので,利用の多い順から紹介しておきたい。

「幼年雑誌」は,『コドモ』『ヨキ子供』『幼年の友』『子供の友』『新子供』『幼女の友』『コドモノクニ』『コドモアサヒ』『幼年画報』『幼年園』,「少年少女雑誌」としては,『少年倶楽部』『日本少年』『少年世界』『譚海』『小

学少年」「小学少女」「復習と受験」「少女世界」「良友」「金の星」「少女の友」「五六年の小学生」「少年」「赤い鳥」「童話」「金の鈴」「少女画報」「少女」などが読まれていたという。

4

児童室の利用者は、尋常5・4年生の男子が多く、次いで同3・6年生という状況で、女子の場合は、尋常4・3・5・6年生が多く利用していた。

大正12年度（10月1日～大正13年3月31日）の児童室の利用状況を見ておきたい。

- 1. 開館日数 165日
- 1. 入館児童数 24,726人
 - 内訳－市内小学校 85校, 在籍児童 21,268人,
 - その他（尋常科卒業, 中学1・2年, 未就学及市外の児童） 3,458人
- 1. 1日平均入館児童 149.86人
- 1. 児童室定員 84人
 - 内訳－尋常4年以上 丸デスク 6個 高サ 各2尺3寸
椅子 男27脚 女27脚 高サ 各1尺2寸6分
 - 尋常3年以下 長方形デスク 3個 高サ 各1尺8寸5分
椅子 男15脚 女15脚 高サ 各1尺2分

大正13（1924）年4月末現在の児童図書冊数は、560部 1,682冊あり、同館の分類表により内訳を示すと次のようになる。

分 類	部数	冊数	%
1. 総 記	8	118	7.0
2. 宗教・修養	29	31	1.8
3. 教 育	52	140	8.3
4. 文学・語学	368	1,036	61.6
5. 歴史・伝記・地理	46	226	13.4
6. 法制・経済	1	1	0.1
7. 算術・理科	42	116	6.9
8. 運動・遊戯・兵事	8	8	0.5
9. 芸 術	6	6	0.4

10. 産 業	0	0	0.0
計	560	1,682	100.0

これから見ると、4門の「文学・語学」が一番多く61.6%を占めており、5門の「歴史・伝記・地理」(13.4%)、3門の「教育」(8.3%)という順になっている。

5

和田萬吉氏は、「児童図書館の活動力は館員の能力を試すものである。」⁽⁶⁾と述べている。この思想は、市立名古屋図書館の活動において生かされていた。単なる図書の利用だけでなく、児童に対する奉仕活動にも真剣にとりくんでいる。

大正12年12月16日、同館講演室において「第1回児童大会」が開かれた。午前には、尋常4年生以下を対象にして、お伽噺「金角大王」、動物の鳴き声「動物列車」等、午後は、尋常5年生以上で修養談「初陣」、動物の鳴き声「鶴の一声」がゲストや職員により行われ、満員の盛況だったという。

大正13年1月13日(日)午後2時より同館講演室において「市立名古屋図書館お伽ばなしの会」が開かれ、毎週行われた。この日は森銃三(「手なし娘」)、阪谷俊作(「鼠のお家」)、森川紫気(「おもちゃ合戦」)の三氏が担当している。とりわけ、森銃三氏の活躍が自につく⁽⁷⁾。

これは、まさしく和田萬吉氏のいわれる「御話会」(story hour)である。「読書欲を奨進する為」に行われ、「館員中の談話の巧な者又は特に此技に熟達して他人を雇聘して、館内で都合のよい時間を選んで三十分前後の間、談話をしてきかせる。」⁽⁸⁾ものである。

さらに、「児童図書ヲ調査研究シ其優良ト認ムルモノヲ公表推薦スルヲ目的」として「名古屋市児童図書研究会」が大正14(1925)年10月15日発足している。出席者は、市内の小学校の校長、訓導、新聞記者、市社会教育課長、同職員、市立図書館職員が参加したのであった⁽⁹⁾。

このように、同館の児童に対する奉仕は非常に活発に行われていたことを知ることが出来る。しかし、当時から今日も見られる現象が、児童の図書館利用を制約しているのである。

「(略)五年になると、もう図書館へは来られない」「どうして?」「だって予科が始まるんですもの」同じく尋四の女の子との対話である。あゝ、子供達を苦しめる、考査といふもの、準備教育といふもの——。(略)今年になってからは一度も顔を見せぬ。入学試験も近づいて、児童室どころではないのだ。

せち辛くなった子供の生活よ——。」

これは、大正13年3月、図書館員が書いた文章である⁽¹⁰⁾。

注

- (1) 拙稿「昭和前期における愛知県の図書館活動」『図書館史研究 第3号』
(1986年3月・日外アソシエーツ株式会社)
- (2) 和田萬吉『図書館学大綱』(1984年11月・日本図書館協会) — 本書に「
児童図書館」の項がある。
- (3) 市立名古屋図書館『市立名古屋図書館々報 第1号』(大正13年1月)
- (4) 『同館報 第5号』(大正13年5月)
- (5) 『同館報 第2号』(大正13年2月)
- (6) 和田萬吉・前掲書・245頁
- (7) 近世学芸史研究者として著名な森銚三氏(故人)もかつて同館に在職(大
正12年4月1日～同14年3月20日)され、「お伽ばなしの会」で第1回から
第13回(大正13年11月23日)まで最初に話されていた。
- (8) 和田萬吉・前掲書・246頁
- (9) 『同館報 第23号』(大正14年11月)
- (10) 『同館報 第4号』(大正13年4月)

<予告> 第7回図書館史研究会名古屋セミナー 開催について

みだしのセミナーを本年8月30日(水)～31(木)の両日、名古屋市内で
開催を予定しております。つきましては、下記のように発表者を募集いたし
ますので、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

なお、セミナーの開催要項等詳細は、後日お知らせいたします。

平成元年2月

名古屋セミナー研究委員長 光齋 重治

(中部大学三浦記念図書館)

記

1. 研究テーマ 「図書館史研究の方法論」

上記のテーマについて、次の分野から研究討議を進めたいと思い

ます。各自のこれまでの研究実績をもとに、その方法論について論じていただきたく存じます。

①国立図書館史 ②公共（立）図書館史 ③大学図書館史 ④専門図書館史 ⑤学校図書館史 ⑥図書館人物史 ⑦図書館思想史

2. 申込（照会）先

発表を希望される方は、分野（①～⑦の中から）と概要（100字～200字）を明記の上、下記宛郵送でお願いいたします。

加 藤 三 郎

3. 申込締切日 平成元年4月15日（土）

■ 昭和63年度決算

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
会 費	120,000	ニュース・レター作成発送費	70,550
利 息	3,619	事務局費	46,486
繰越金	228,349	繰越金	235,932
計	352,968	計	352,968

昭和63年度 監査報告

平成元年1月、会計検査をいたしました。

その結果、

- 1) 支出に関する帳票・領収書類および収入に関する帳票類がよく整理され、かつ記載事項にも誤りがなく、適正であることを認めます。
- 2) 予算の執行に係わる会計処理が適正であり、運用についても十分な配慮がなされていることを認めます。

以上、報告いたします。

平成元年2月3日

監事 渡辺 信一 印

“ 大城 善盛 印

■ 昭和63年度事業報告

1. 第6回「図書館史を考えるセミナー」の開催

昭和63年9月8日(木)、9日(金)の両日、法政箱根荘にて開催、参加者は12名。

2. 図書館史研究会 ニュースレターの発行

- (1) 第30号ニュースレター …… 昭和63年2月10日
- (2) 第31号ニュースレター …… 昭和63年4月20日
- (3) 第32号ニュースレター …… 昭和63年7月10日
- (4) 第33号ニュースレター …… 昭和63年11月10日

3. 機関誌『図書館史研究』第5号の刊行

昭和63年9月1日 日外アソシエーツから発売

4. 運営委員会の開催

- (1) 第25回拡大運営委員会 …… 昭和63年3月11-12日
衆議院共済組合葉山保養所
- (2) 第26号運営委員会 …… 昭和63年9月9日 法政箱根荘
- (3) 第27号運営委員会 …… 昭和63年12月9日 神田パンセ

その他お知らせ事項

- * 運営委員会報告 昭和63年12月9日、神田パンセにおいて開催
平成元年度研究セミナー、「図書館史研究」第6号等について審議しました。
- * 平成元年度の予算、事業計画については、本研究会の事務局がこの4月に図書館情報大学へ移転することになっており、次の機会にお知らせいたします。
- * 新入会員